

熟れた継母の誘惑 ～精液の匂いを嗅ぎながら指を使ってしまいました～

直輝／NAOKI

第一話 菜美恵 三十三歳

私は今三十三才で、三年前に今の主人と再婚しました。

主人には前妻との間に生まれた十六才の息子、幸彦がいました。

私は幸彦を実の子のように可愛がり、立派に育てようと思いました。

もちろん、主人と結婚してからは、他の男性と肉体関係を結んだことは一度もありません。

でも、主人との性生活にも少し不満がありました。といっても、セックスレスではありませんでしたし、セックスもすごく気持ちのいいものでした。

私もまだ三十三ですし、自分の血の繋がった子供は欲しいと思っていました。主人も子作りには賛成でした。

四十四才の男盛りの主人のセックスは濃厚でした。前戯も長く、挿入しても三十分以上は保つので、私は時々感じすぎて失禁してしまうこともあるくらいでした。

ペニスもすごく硬いし、これまで付き合ってきたどの男性のものより大きいんです。

でも、忙しい主人は、月に一、二回しか私を求めてきませんでした。

私は毎日でもしたいくらいなのに.....。

そんな欲求不満気味の私に、高校生の幸彦は眩しく映りました。日増しに逞しくなる幸彦を見ていると、身体の奥が疼くことがあります。

朝起こしにいくと、時々、はだけた布団から大きくテントを張った幸彦の股間を見てドキマキしてしまうこともありました。

あの大きなペニスが自由に出来たら.....。

義母と子の垣根が超えられたら.....。

そんないけない妄想に耽ってしまうこともありました。

そんなある日、幸彦の部屋を掃除していると、どこからか男の匂いが漂ってきました。

主人とのセックスの後に漂ってくる、あの嗅ぎ慣れた匂い.....。

「まさか.....」

この臭いは、部屋のゴミ箱から漂ってきていました。私は胸をどきどきさせながらゴミ箱の中を探りました。

そして、中からじっとり濡れたティッシュの塊を見つけました。拾って見ると、あの精液独特の鼻をつく臭いがしました。

「あああ.....」

まぎれもなく、男の子が性を処理した後の残骸でした。

私は頭の中が真っ白になってしまいました。

そして、お恥ずかしい話ですが、その場でティッシュについた幸彦の精液の臭いを嗅いで、幸彦のペニスに思いを馳せながら自慰をしてしまったのです。

指を二本もあそこに入れて、中をかき回してしまいました。

主人の出張の日には、よく一人寂しく自分を慰めていましたが、そんなオナニーとは比べ物にならないくらい気持ちよかったです。

いつものオナニーでは、一度達すれば満足するのですが、このときは、幸彦の匂いで興奮が治まらず、一度では満足できず、立て続けに三回も行ってしまいました。

激しく達したため、しばらくその場でぐったりしていましたが、やがて正気に戻り、背徳感と罪悪感と羞恥心と自己嫌悪に苛まれ、幸彦の部屋を出ました。

夕方に家に帰ってきた幸彦と目をあわすことができないくらい、その日は動揺していました。

私は、あの日の快感を忘れる事ができませんでした。

その日以来、幸彦の部屋を掃除してから、ゴミ箱から幸彦の精液のついたティッシュを拾って、臭いをかぎながらオナニーをするようになりました。

ゴミ箱に捨てられるティッシュの残骸から、幸彦は毎日、二、三回は性の処理をしていたようでした。

主人の精液と違って、幸彦の精液はとても神聖なものに思えました。

時々、感じすぎて、幸彦の部屋のカーペットを私の恥ずかしい汁で汚してしまうときもありました。こんな時、私の匂いが幸彦に気づかれはしないかとときどきしながら、カーペットの汚れを綺麗に拭きました。

でも、そのときはまだ、義理の息子と最後の一線を越えてしまうことなど思いもよらないことでした。

ある日の平日、私は以前勤めていた会社の友達に電話で呼び出されて、一緒に昼食を摂りました。

彼女も昨年、息子のいる男性と再婚しました。同じ境遇の私たちは、よく会っては、お互いの夫の愚痴や、お姑さんの愚痴などを話し聞かされていました。そして、そのあとはバーゲン情報の交換やグルメの話になるのです。

しかし、その日は会ったときから彼女の様子がおかしかったのです。何か悩んでいるような感じでした。

どうしたのか聞くと、彼女の口からとんでもない話が出てきました。

彼女の家にはご主人の連れ子で、幸彦と同じ年頃の義理の息子がいるのですが、その子とセックスしてしまったというのです。

私もよく知っている子で、アイドル的な雰囲気のある上品でスリムな子なのです。

私の友達がたまたま、お風呂場に洗濯物を取りに行ったら、風呂のドアが少し開いていて、中を覗くとその子がお風呂場でオナニーをしていたというんです。その立派なペニスに驚いたと言っていました。

「太さも、長さも夫よりもワンサイズ大きめで、反りがあって、赤黒いの。もう、ばっちり見ちゃった。もう、びっくりしちゃって……」

それから、ご主人が出張で不在の夜、突然寝室に入ってきて襲われたらしいんです。

「高校生にもなると力がすごく強くて……抵抗したんだけど結局……。で、主人にも言えないし……」

「それからどうなったの？」

「……毎日私の身体を求めてくるの……」

彼女の話では、高校生の男の子はすごく性欲が強いらしく、セックスでは三回は射精しないと満足できないらしいんです。

「あの子、いく時、私に抱きつきながら、ママ～って叫ぶのよ。母親がいなかったからかしら…
…？　すごく甘えん坊なの……」

禁断の一線を越えたと悩んでいる割には、そういいながら話す彼女の声がいつもより弾んでいるように思えました。

義理の息子とセックスするようになってときめいているんだと思いました。

私は彼女の話を知っていると、興奮で体が火照って、パンティを汚してしまいました。

「あなたもご主人の連れ子には注意なさいよ。きっとあなたを女として見てると思うわ.....」

彼女と別れてから家に戻ると、幸彦の部屋に行き、ゴミ箱の中を探って、いつものようにオナニーの残骸を拾いました。そして、その精液の匂いを嗅ぎながら、床に座り、パンティの中に入れました。そして、幸彦とセックスする場面を想像しながら、濡れた膣を激しく弄びました。

「ああっ！ いっちゃう！ 幸彦！」

私は幸彦の名前を大声で叫びながらあっという間にいってしまいました。

それから、幸彦がサッカー部の合宿に出かけた後、幸彦の部屋の片づけをしてたら、ベッドの下に差し込んだ掃除機に私のショーツ一枚が引っかかって出てきたんです。

(あれ.....どうしてこんなところに.....)

しかし、そのショーツから精液に匂いが漂ってきたのです。

ショーツを広げると精液らしきものはついていませんでしたが、性器のあたる股間の部分が湿っていて、そこからあの独特の匂いが.....。

(まさか.....)

私はこのショーツで幸彦が何をしたのか想像できました。

私はこっそり部屋中を探すと、クローゼットの中から、洗濯前の私のショーツが二枚出てきて、

それにもオナニーに使った後がくつきり。

それにアダルトDVDが十枚も出てきました。

(幸彦は私を女としてみてるんだわ.....高校生って、父親の再婚相手でもそういう目で見
るんだわ.....)

私は友達の話を読み出しました。

まだ十六才、去年までは中学生.....。

気になったけれど、元通り、下着もDVDも隠しました。

私は家事を終えると、その日の内に図書館に行って少年の性に関する本を読みまし
た。しかし、余りピンとくる本が無くて、翌日に近所の大きい本屋に出かけました。

それらしき本を五冊くらい買って帰り、読みました。

真面目に書いてある本なのに、その過激な内容に興奮しました。

(体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしくお願
いいたします。)